

<企画書>

提出者:平 ダーナー

【タイトル】日米終戦 80 周年によせて Flying Swans

【概要】

本書は、第二次世界大戦と朝鮮戦争に翻弄されたアメリカ人の父、日本人の母、そして二人の間に生まれた著者自身の体験を描くノンフィクションです。父はコレヒドールの激戦で捕虜となり、終戦後に日本へ戻るも朝鮮戦争で PTSD を患い失踪。母は仕送りが途絶え、混血児養護施設に著者を預ける苦渋の決断を強いられました。

著者は成長とともに渡米して父の家族に再会し、両親がわずかに共有した幸せと、再び訪れた別離の悲劇を、戦争の爪痕とともに浮き彫りにしていきます。父が保管していた母の手紙や母が描いた父のスケッチ、さらにオールドノリタケ“Flying Swans”に込められた想いを通じ、“家族とは何か”“平和とは何か”を問いかける一冊です。

【想定読者層】

- 戦争体験や戦後史に関心のある読者
- 在日米軍基地周辺地域や混血児の歴史に興味がある方
- 親子や家族のきずな、アイデンティティに悩む方

【構成案】

第 1 章: 父母と私の出会いと別れ

コレヒドールの激戦と父の捕虜体験、三菱岩崎邸で働く母との出会いと結婚、そして嵐山で暮らした束の間の幸せを描く。

第 2 章: 朝鮮戦争がもたらした悲劇

父の出征と脱走兵としての苦悩、音信不通となる父と生活苦に陥る母、そして著者の混血児養護施設「福生ホーム」での幼少期を語る。

第 3 章: アメリカの家族との再会

高校卒業後の留学による父との再会、戦争恐怖症に苦しむ父との生活、そして日本での結婚・離婚・子育て・母の介護までを描写。

第 4 章: 新たな一歩と見えてきた真実

母の遺品から見つかった父の若き日のスケッチ、父が大切に保管していた母の手紙、そしてオールドノリタケ“Flying Swans”に託された想いを紐解く。

第 5 章: 日米を結ぶ白鳥たち

両親からの最後のメッセージ、横田基地司令官スティバースの功績と戦後の福生の変貌、そして親子の絆を超えて広がる平和への祈りで締めくくる。

【プロフィール】

子どもの頃は混血児の施設で過ごしましたが、母が親権を守ってくれたおかげで、日本人としての生活を続けることができました。中学・高校時代は高度経済成長のまっただ中。母も祖父からの勘当が解け、東京・品川の実家に戻ることが出来て、普通の家庭生活を送れるようになりました。

都立昭和高校では、奈良女子大出身の先生に憧れて国文学科への進学を希望しましたが、母子家庭の家計を考慮して断念。就職率の高い津田スクールオブビジネスの英語学科へ進むことに。卒業後、アメリカにいる実父を探し当てて渡米し、Texas 州の Durham Business College に留学しました。そこで父方の祖父母や親戚とも交流が始まります。

帰国後は働きながら慶應義塾大学通信教育課程の国文学科に入学して、中古和歌文学を学びたいという長年の夢をかなえました。7年かけて卒業。卒論は「伊勢物語」で A+ 評価でした。今でも中古和歌の恋歌を中心に、和泉式部や藤原定家、後鳥羽院との“対話”を楽しんでいます。

その後は外資系企業で重役秘書や広報を担当。結婚・出産・離婚を経験し、シングルマザーとして家族を支えながら建築系や電気工事など多くの資格を取得しました。以来 30 年以上、外資系企業でファシリティマネージャーやプロジェクトマネージャーとしてオフィス設計・管理に従事。医薬のアベンティス、通信のノキア、不動産のジョーンズラングラサル等のマネージャー職を経て定年を迎えた後 10 年を経た現在も、現役でオフィス構築の仕事に携わっています。

<書籍のサンプル原稿(抜粋 約 2,100 文字)>

『日米終戦 80 周年によせて Flying Swans』

第 1 章 父母と私の出会いと別れ(抜粋)

私が生まれたのは、1948 年の占領下の日本でした。父はテキサス州出身のアメリカ軍人で、母は東京・品川区生まれの日本人。当時、母は接收された三菱岩崎邸でメイドとして働いていました。二人は共に 11 月生まれの 28 歳でした。

父は真珠湾攻撃をきっかけにテキサス州の州兵として軍に志願し、フィリピンのコレヒドールでマッカーサーに見捨てられる形で日本軍の捕虜となりました。収容所の過酷な環境で日本人の看護婦とプラトニックラブの関係になりました。終戦後に解放されて帰国した父は、命の恩人である彼女にプロポーズするため再志願して来日します。ところが、関係者をたどるうちに彼女がソ連軍の進駐時に奉天で自殺を図ったと知り、父は失意のまま占領下

の東京をさまよいました。そんな絶望の中で出会ったのが、のちに私の母となる女性だったのです。

その出会いはある種の運命だったのかもしれませんが。祖父の猛反対もあって正式な結婚には至らなかったようですが、それでも二人は京都・嵐山で穏やかな新婚生活を送り、私が誕生しました。やがて父は朝鮮戦争に召集され、前線でのゲリラ戦の恐怖が彼を蝕んでいきます。脱走兵となって更送された先は西ドイツ。父は戦争の悪夢から抜け出せず、そのまま行方不明となってしまいました。

父からの仕送りが途絶えた母は、私を親戚に預け、自らは家政婦として働き始めます。しかし、いずれその親戚の家も出ざるを得なくなり、私は福生ホームという混血児のための施設に入所しました。まだ小学生になる前だった私には、「父はどこへ行ってしまったのか」「なぜ母と離れて暮らさなければならないのか」を考える余裕などありません。ただ、月に一度、母が訪ねてきてくれる日だけが楽しみで、彼女が差し入れてくれる少女漫画雑誌『りぼん』を読んでいる間は、束の間の夢を見ることができたのです。

福生ホームには、同じようにアメリカ軍人の父親を持つ子ども達もいましたが、皆、日米養子縁組で引き取られていきました。新聞には「民族の純血を保てず、全国で20万人もの混血児が小学校に入学するのは困ったことだ」といった記事が載る時代です。通学路で冷ややかな視線を感じる瞬間もありましたが、福生第三小学校に入学して初めてホームの外の世界や図書室の世界名作文庫に触れ、先生達からも守られて楽しい生活が始まりました。Occupied Japanの時代が終わり戦後民主主義の始まりです。

やがて高度経済成長期を迎え、人々の価値観が変わると、混血芸能人の活躍も相まって「混血児」は次第に「ハーフ」と呼ばれるようになりました。私は小学校高学年で福生ホームを出て母と暮らし始め、中学・高校と進むうちに「混血児だ」という意識に苦しむことはほとんどなくなりました。ご近所の人達にも可愛がられ、友人たちと心豊かな楽しい学生時代を過ごせたように思います。それでも心の奥底では、「父はどこにいるのか」「なぜ母と私を置いていったのか」という疑問が、消えずにくすぶっていたのかもしれません。

高校で英語が得意科目となったのも、そんな父への思いが大きかったのかもしれませんが。英語を身につけて、いつか父を探したい——そう考えた私は、卒業後に専門学校へ進学すると同時に、アメリカにいる祖母らしき人へ手紙を書いてみました。しばらくして祖母から返事が届き、私は急遽アメリカへ留学することになったのです。

ところが、アメリカでの生活は、アメリカのテレビ番組から私が思い描いていた「豊かな国」とはまるで違っていました。祖父母は年金暮らしで質素に過ごし、ようやく再会した父は戦争

恐怖症を抱え、夜な夜なライフルを握りしめて徘徊することもありました。それでも、父と同じ空間を共有できることが私には何より大切でした。荒んだ生活の中でも、父が京都での短い幸せを今なお大切に思い出しているのだとわかったからです。

私自身も日本へ戻ってからは、結婚・出産・離婚を経て、外資系企業での激務と子育ての後には母の介護に追われる慌ただしい日々を送りました。母が他界して12年が経ち、定年後 Workplace engineer としての慣れたゆとりある働き方の中で、ようやく自分の過去を振り返る時間を得ました。「父と母が共に過ごしたわずかな幸せ」をどうしても形として残したいという思いが募っています。

90歳で他界した母の遺品の中から見つかった、若き日の父の横顔を描いたスケッチ。父が晩年まで大切に保管していた母の手紙。二人が共有できた時間は短かったかもしれませんが、その思いは紛れもなく私という存在を通じて今も生き続けています。オールドノリタケの“Flying Swans”——かつて祖母が贈ってくれたコーヒーカップの白鳥の絵柄のように、父と母の魂はきっと海を越えて舞い続けているはず。その思いを本書に込め、日米両国を越えて多くの方々に届けたいと願っています。